

平成27年4月の大阪森林便り

5,000人を超える会館見学者

展示室の活用方法も精力的に検討

大阪木材仲買会館の見学者の対応は、平成25年3月から開始しています。見学者は木材業界関係、官公庁、大学教授や学生、建築・設計関係、一般の方々に至るまで幅広く、連日のように見学希望の問い合わせが寄せられています。当初から社会的な関心も高く、見学者総数は本年2月をもって5,000人を超えました。

大阪府以外では、北海道から鹿児島県までの見学者・団体の来場があります。また、韓国、台湾、中国、ラトビア、イギリスなど、海外からも見学者が乙連れることもあります。(2015年3月1日 大阪木材仲買協同組合新聞記事から抜粋)

国産材需要押し上げ — 林業活性化に期待高まる



木質バイオマス発電向けに国産材の需要が増えています。一方、木材が高値で取引される事例もあり、安定供給への懸念も生じ始めました。

品質の良い丸太は製材工場で住宅用に加工し、低品質材を発電用に利用します。

木質バイオマス発電では、木材を粉砕機で数ミリ～4cmほどのチップにします。発電所の焼却炉で燃やしてタービンを回し発電します。安価な杉や松の間伐材を多く使います。

国産丸太を燃料に使うバイオマス発電所は、2014年11月時点で15カ所が稼働し、数年以内に43カ所が稼働予定です。

国産材の需要は2013年時点で2174万m³。発電用はそのうち6%に当たる121万m³。2018年に約400万m³になる見通しです。バイオマス発電は、国産材需要を2018年にかけて1割強押し上げるとみられています。

国内の森林資源は2012年時点で49億m³と、年間8000万m³のペースで増えています。(2015年3月6日 日本経済新聞記事から抜粋)

丸太争奪、製紙などに影響 — 需要拡大で安定供給課題



製紙に使う丸太が不足しています。国産材は製紙原料の3割を占めます。発電向けの需要が増えて製糸に使う丸太が足りなくなる構図です。

製紙向けの国産材価格は上昇しています。製紙用のチップに使う針葉樹丸太の平均価格は1月、前年同月比11%高くなっています。合板用は比較的高品質の国産材を使いますが、影響が出ないとは限りません。

丸太の供給をすぐに伸ばせない事情があります。林道の整備が進んでいません。

2010年の林業従事者は51,200人と、2000年と比べ24%減少。

小さい発電所なら比較的近くの山林だけで調達できます。経済産業省の有識者会議は、木質バイオマス発電の中でも小規模なものを優遇することを示しました。

(2015年3月7日 日本経済新聞記事から抜粋)

木材の輸出額最高 — 昨年45%増 北米から供給減少で



木材の輸出が活発になっています。杉丸太やベニヤ合板といった国産木材の2014年の輸出額は前年比45%増の178億3400万円となり、2年連続で過去最高を更新しました。北米からの供給減を背景に、中国や韓国で日本産の需要が大きく伸び、九州などの木材産地も国内での需要不振を補おうと輸出に力を入れているためです。

2014年の木材輸出は、中国向けが96%増、韓国向けが73%増でした。

(2015年3月16日 日本経済新聞記事から抜粋)

自然守る林業女子 — 杉を伐採、山から運ぶ



「適度に木を伐って山を管理することが、自然を守ることになります。」

「自然に囲まれて働くのは、最高に気持ちがいい。」

全国各地に林業女子会が生まれています。

(2015年3月28日 日本経済新聞記事から抜粋)



今月の木の話

木の年輪幅は本当に南側が広いのか？

日当たりが良いほど光合成によって生産される糖分が多くなるので、南側の木が良く育ちます。

でも、「木の南側が良く育つ、つまり、南側の年輪が広がる」ことにはなりません。

樹幹では樹皮と木部の間の形成層が細胞分裂して径が年々太くなります。新しい細胞の原料となる糖分は、樹木の上部にある葉の葉緑素で光合成によって作られたものです。そして、糖分は樹幹全体にらせん状や扇状に拡散しながらゆっくりと降りていきます。

ですから、木の南側の葉で糖分がたくさん合成されたとしても、幹の南側だけに糖分が集中することにはなりません。

葉から栄養が拡散しながら降りてきて幹が肥大生長するので、南側だけに栄養が偏ることはありません。

(日刊木材新聞社発行「今さら人には聞けない木のはなし」より抜粋)

